
いただきます

叶井秦雨

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
いただきます

【Nコード】
N3674F

【作者名】
叶井秦雨

【あらすじ】
俺は、二人とも好きだよ？
友人想いな青年の人食い話。

（前書き）

- ・ カニバリズム表現があります。
- ・ おかしい人の視点です。

「君だつて本当は灯が好きだから殺した。憎んでなんかいなかった。だから眼球も脳みそも心臓も全部全部全部全部全部食べれたんだろ？まあ半分は俺が食べたんだけど。」

誰にも知られずに殺せば、行方不明になった灯は五年十年二十年と時が経つて皆忘れてしまうからね。

殺した本人は食べちゃったわけですつと一緒にいるから忘れるなんてことはない。四六時中一緒にいる物を忘れたりなんてしないだろう？そういう意味では忘れないようにするために殺したのかもね。

ん？違うな。忘れたくないから食べれたのかなあ。なかなか忘れられないものだよ人殺しも人食いも。

だつて普通はそんなことしないし。そんなことする人は一種の異常者。そんな願望を持つ俺も異常者だと思う。

こんなこと考えといって普通だと言うほど世間知らずじゃないし、これが普通だつたら世界は相当イかれてる。今の人口問題も食糧難もとつくに解決してるよ。…ところで君は俺にだけ喋らせるつもりなの？さつきから何も言つてこない。喋るのも億劫かな。食べ過ぎで。

「

特に何も言わない。こっちがずっと喋っている一方的な言葉は君に届いているのかな。

「君は、灯を食べちゃったね。」

微かに反応があつた。小さな声で肯定する声が。

「俺だつて灯が好きだつたんだよ？本当に、食べちゃいたいくらいに。」

「……あ……う……」

また、小さな声が聞こえた。

「ほら、俺たち友達じゃない。灯と俺と君で3人、近所でも有名な仲良しでさ。今だってそう思ってるけど君は違うの？どんな友達よりも最優先するべき友達だと思ってたんだよ。君も灯もね。」

なんてって、約束じゃないか。ずっと3人で友達だって。それに君と灯は俺にとって最愛の2人だ。それ以上望むのは贅沢つてものじゃないかな？例え愛情の大きさに差があつたって。俺は2人を愛しているよ。」

これだけは変わらない。不変だ。

灯が好きだ。気だてがよくて器用な灯が好き。

遊慈ゆうじが好きだ。優しくて誰にでも平等な遊慈ゆうじが好き。

「遊慈？」

「辛い……から……死のう……と……した。」

今度はさつきとは比べ物にならない位はつきりした、でもまだ弱弱しい声が聞こえた。

「片思いは……もう……辛い……から……独りで……死ぬのは……嫌……だから……二人を道連れに……しよう……とした……。道連れにしよう……として……最初に殺した……のが……灯……だった……それだけ。別に……獅良しゅうら……からでも……良かったん……だ……。灯……ごめん。」

ああ、なんとなく想像通りだった。

寂しがり屋の遊慈は、独りでいるのが怖かったんだ。だから殺しちやっただ。

けど、遊慈は優しいから、殺してしまった灯に対してすまなさそうにする。

全部、想像だったんだけど、本当にそうだったんだ。

俺はちゃんと、遊慈のこと、解ってたんだ。解ってないなんてこと、ない。

「俺と灯は親友だから？」

首だけ動かして肯定した遊慈を、俺はそつと抱きしめてみた。
冷たくて、気持ちいい。

「俺は道連れにされてもよかったよ。」

「バイ…なんだな。」

「こんなのを恋愛感情というのなら、すべての恋する乙女に謝らなきゃね。」

恋愛にするにはあまりに不純過ぎる思いだ。

でも、愛情よりは純粹な想い。

さつきよりも鮮明に聞こえてきた遊慈の声を聞きながら、俺はもう一度彼に尋ねた。

「話をうんと前に戻すけど、小食の遊慈が灯を半分も食べれたのは、死んでも灯を忘れなくなかったから？」

「…そうなのかも。」

忘れられるのは怖い、だけど、死んで忘れるのも怖い。

俺が思うに、遊慈は三人の中で一番憶病なんだ。

俺は遊慈が死んだって忘れたりしなかったと思うし、俺が死んだって二人を忘れたりしない。きっと灯もそう思ってくれるだろう。今となつては、ありえない話だけど。

「遊慈。そんな怖がらなくて、良かったんだよ？」

「でも俺、怖く、て。」

「うん。不安だったんだね。でも、もう大丈夫だろ？」

『うん』と返事をする遊慈。その声ははっきりと聞こえてきている。いつもどおりの音量で。

「御馳走様。さて、後片付けしないと。」

後ろの扉からがたと騒々しい音が近づいてくる。

人の家に無断で入るなんて、本当に、どうかしてるよあいつら。

「遊慈っ！笹お…か…。」

「富田君！見つかった!？」

「高田っ見るなっ!!」

「え…?…ひっ!い…いやあああああああああああ
あああっ!!!!!!!!!!」

ああ、五月蠅い女だなあ。人様の食卓見てそんな甲高い悲鳴を上げるなんて。近所に迷惑だろ？五月蠅い上に馬鹿だなんて、救えないね。それで灯の友達だなんて、灯には合わないよ。灯にはもっと物静かで賢い女の子が良いに決まってる。だから、高田由香たかたゆかは嫌いなんだ。灯に釣り合わないくせに当然のように灯の親友なんて位置に

居るなんて。おこがましいにも程がある。

富田…なんだつけ。そうそう、とみたかつぎ富田香月だつけ。こいつも嫌い。人畜無害そんな面の裏で遊慈を騙そうとする。可哀想に、遊慈はこんな男に騙されたのか惚れてしまつて、『彼女持ちだつていうのにどうしたらいいんだろう』と相談に来たんだ。

その彼女が、灯だつた。こいつは遊慈だけじゃなく灯も騙していたんだ。もしかしたら、高田より嫌いかもしれない。

どちらにせよ、遊慈よりもまずそうだなあ…。

「笹岡…おまえ…遊慈を食つたのか？」

「だから？」

「っ…！狂つてる…っ…！」

「狂つてる、だつてさ、遊慈。遊慈の好きな人にとって好きな人を食べることは狂つてることなんだつて。」

「そう、なんだ。」

「俺としては、灯と付き合つてなお且つ遊慈にも色目使つたこいつの方が頭おかしいと思うんだけど。」

「色目…？てかお前誰と話してるんだよ！？遊慈は、お前が食つたんだぞ…！！？」

そう。俺は遊慈を食べた。だから、もう俺にしか聞こえない。

灯と遊慈の声は俺にしかわからない。

「これは遊慈の望みだ。叶わない恋から逃げたくて、でも一人じゃ逃げられないから俺と灯と一緒に逃げてもらいたかつた。なら、俺が灯を食べた遊慈を食べれば万事解決だろ？これで三人離れることなく、遊慈は辛い思いをせず、灯はお前に騙されず、俺はずっと二人といれて、一石二鳥ならぬ一石三鳥だ。」

「遊慈の望みだ？ふざけんじゃねえっ！お前、遊慈がなんて言つてたか知ってるか？“獅良が怖い”って言つてたんだぞ！？何時もの、

昔の獅良は何の躊躇いもなく人を食ったりするイカれた奴じゃなかったって！お前おかしいよ…！何の躊躇いもなく幼馴染を食うなんて…どうかしてる…っ…！」

「君たちって本当に馬鹿。好きだから、何の躊躇いもなく食べれるんだよ？ねえ、遊慈。」

「そうだね。」

「…っ…くそっ！」

「さて、二人とも、邪魔だから帰ってくれないかな？それとも、後片付け手伝ってくれるの？」

「い、やあ…灯…一之瀬君…っ！」

座りこまれても、邪魔なただけど。

いつそこいつも殺しちやおうか。灯のお気に入りだし、一緒にしちやおうか。

「ねえ、灯。どうする？」

「これ以上食べたら、お腹壊すわよ？」

「それも、そうだね。」

あんな女、食べてくれって言われたってこっちから願い下げだ。

それに、流石の俺も、遊慈の分で腹いっぱいだし。

でも、遊慈で満たされてることは、すごく幸せ。

「…わかった。帰るよ。でも、最後に一つ聞いていいか？」

「どうぞ？」

「お前、もしかして遊慈のこと好きだったんじゃないか？だから、幸せなんだろ？」

「…あ。」

そう言われて、すんなりと納得してしまった。

確かに、灯よりも遊慈の方が美味しかったし、遊慈を食べた時の幸せは、灯を食べた時には感じなかった。
つまり、俺が富田を嫌っているのは、遊慈を夢中にさせていたから。遊慈を、独り占めしていたから。

「そつか、そうだね。気がついたよ。有り難う富田。だから俺、富田が嫌いなんだ。」

「そりゃどうも。」

「お前とはもう二度と会わない。遊慈には勿論、灯にも会わせてやらない。お前には二人ともやらない。」

「そつかよ。」

「…質問はこれだけ？じゃあ帰って。」

「そうする。高田、立てるか？」

「灯…一之瀬君…灯…灯…灯…！！」

虚ろな目をした高田を、富田はおぶって帰って行った。
さて、これからどうしよう？

END

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3674f/>

いただきます

2010年11月1日09時12分発行